

## 三、父 母

エリイやエリゼの如き兄弟を初め、十人餘りの立派な子供達を生んだ両親は抑も如何なる人々であつたか。それはフランスの如きカトリック教國には珍らしい、カルヴィニストで、殊に父は熱烈にして嚴肅な信仰に生きた牧師であつた。佛國ドルドーニ河左岸のサント・フォア・ラ・グランド(ポルドオ附近)という所の古風なデロンドの家にジャック・エリゼ・ルクリュ(Jaques Elisee Reclus)が生れたのは、一八三〇年三月十五日であつた。兄のエリイ(Elie)が生れたのは、それより三年前の一八二七年六月十七日であつた。彼等の父は、ジャック・ルクリュという人で伯爵家に屬し、最初ドカズ公(Duc Decazes)の秘書を勤め、母はルイ十八世の有名な大臣の一族であつたので、父が若し欲するなら、収入の多い高級の官途への登龍門がその前に開かれてあつた。しかるに彼は自ら牧師たらんことを望み、若年にも係わらず、その才能を認められて監督會議の議長に選ばれ、その古典研究の結果として教師たるの資格をも與えられた。こう

した恵まれた環境にあつた彼ではあつたが、その良心の聲に聽いて、眞にキリストの使徒たるべき者は、たとえ「枕すべき一箇の石を持たなくとも」神の道に専心せねばならぬ、と考えるに至つた。國家の給與も、世俗の榮譽も、天來の使命を外にしては、これを受けるのは罪惡であろうと考えるのであつた。彼は友人たちに相談したが、友人たちは勿論現在の好地位に留まることを勤め、之を棄てるのは空想であり、妻子に對する罪惡である時まで説いた。しかし、彼の良心はなお平安を得なかつた。

助言を求める友人を發見し得なくなつた彼は、獨り祈るより外に道はなかつた。彼は熱心に祈つて漸く確信を與えられ、遂に決然として起ち上る日が來た。溢れ落ちる涙を押えつつ、信者や、友達や、親族やを後にして、ただ眼の前に放置された幼児のエリイを抱いて馬に乗り、南方に向つて發足した。ピレネー山麓の小都會オルテ及びカステタルブの基督教徒の招きに應じたのである。彼の後に從行したのは、招請状を持つて來たベスアという大男一人であつた。それは一八三一年の末のことで、エリイはまだ三、四歳のいたいけ盛りであつた。エリイの思い出によると、その五十里餘りの道中を如何に通過したか、彼の印象に残っているのは、ただ溫いマントに包まれたということだけであつた。しかしながら、一切を棄てて無一物で起ち上つた牧師ルクリ

ユの意氣と勇姿とは、まことに眼に見えるようである。當時のフランスは、王政復古時代の末期であつて、このような邊陲の地にも烈しい宗教運動が傳播し、スキス生れのキリアム・ピット(William Pitt)と云ふ熱心な傳道者が來て、改宗者の群によつて國教カトリック教外に組織された『教會』の自治せんことを盛んに宣傳した。しかし、彼はその熱心さに於て一般から非常な尊敬を受けたのであるが、ただ外國人たるの故を以てここから退去せねばならなくなつたのである。ところが、新來の『免許狀所有者』も、その熱心さに於ては前者に勝るとも決して劣ることなく、公私の會合と説教とは到る所に引き續いて行われ、農民の群や、オルテの町民等が多數これに惹きつけられた。この若い福音宣傳者の狂熱的雄辯に魅せられた群衆は、その周圍に押し寄せてき、その説教の原稿要趣は村から村へと廻送された。さてこの牧師に連れ添う若いルクリユ夫人が、またその熱心さに於て同様に人々の讚嘆するところとなつたが、ただその行き方は良人とおのすから異つていた。即ち彼女は兒童のために學校を開き、先生としての卓越せる技能が評判になつて、多數の少年が幾キロメートルも隔つた遠方から通つて來るのであつた。學校の教師として、貧しい家庭の主婦として、また數多き小供達の母親として、彼女の生活は、朝起きて夜寝るまで一分の暇もないほどの忙がしきであつた。その良人たるルクリユ牧師はまた剛直な性格

の持主で、その家族や信者達や夥だしい知友達を一身に統合する力を持つていたと、後の人達は言い傳える。

牧師ルクリュ一家がオルテへ移轉した際には、エリゼは一しよに連れては行かれなかつた。彼はその時、ドルドーニ縣のラ・ロシという小さな町の収入役たりし祖父のもとに送られた。エリゼ自ら語る所によれば、祖父達は彼を養育するのではなくて、寧ろ子供がなすままに放棄して置くのであつた。祖母は少々手荒な方で、エリゼがズボンに穴でもあけたり、かぎ裂でもすると、きつと頭をたたかれた。祖父にもよく臀を打たれた。しかし彼等は素より深い愛情を持つてはいたのだ。エリゼがカステタルブの両親のところに行つたのは彼が八歳の時であつた。ルクリュ一家は初めオルテに居を卜し、次に近所のカステタルブに移轉したが、一八四〇年に至つて再びオルテに轉住した。この時エリゼは既に多くの弟妹とともに両親のもとに愛育せられて幸福にその日々を送るのであつた。

「それは小供等の生活の歡喜の世界であつた。およそ物語に聞いたすべてのものが再現された神仙境であつた。その樹木は、彼等が日曜ごとに二度づつ通つたバイクトの殿堂とは異なつた、眞に莊嚴な神殿を成していた」

とは、エリゼ・ルクリュが自ら當時の居住を追想しての言葉であつた。

さて牧師ルクリュが、その子供達に與えた感化の多大であつたことは言うまでもない。正面からは子供等の品性成立の上に、反面からは思想形成の上に、それぞれ強い影響を與えたことが見出される。子供達は彼の熱誠と無限の愛情とに對して深甚な尊敬を拂わざるを得なかつた。子供等は『聖書』に對して懐抱せる父の盲信によつて壓倒されざるを得なかつた。聖書の傳説は、彼にとつては、最後の一點一角までも事實なのであつた。彼は當時科學世界に於てなされた發見、進化説に基礎を與えた諸發見を決して無視した譯ではない。しかし彼は、それを以て惡魔の陥穽であるとしか見なかつた。子供達は、女子達も(十一人の兄弟姉妹)その父が實行し且つ同様に實行すべく子供等を勇氣づけるところの行動と、子供達の常識が納得し得ない父の言葉との間に、判然たる區別を置いた。しかも爺ルクリュは、子供達の誰もが、とても到達し得ない高い友愛の情熱を持つていた、と子供達は言うてゐる。

ここに私は、牧師ルクリュの嫡孫であるポール・ルクリュ(エリイの長男、エリゼの甥で且つその事業の承繼者)の思ひ出話を挿入する。『種蒔く人』(Le Semeur)のルクリュ兄弟號にポールが書き送つた長大文中の一節である。

「一八八六年、エリゼが、母の埋葬に際して、牧師ルクリュの承繼者たるオルテの牧師モニエに物語つた、そしてモニエがまた私に物語つた一事がある。父（エリゼ等の）は自分の畑の馬鈴薯が誰にか盗まれたことを發見して、今度は自分みすから若干の量を掘り出して、それをその夜になつて道ばたに置いてやり、『欲しい人達が、それを盗むことなしに持つて行けるようにした』エリゼは語り續けて、『それは非常に善いことです、私自身にはそれが、うなずける』と言うたが、しかし更に付加えて、『爺はわが物、汝の物などという聖書の意を服膺したので、でなければ、彼はその薯を汚れにさらすよりは寧ろ使用時まで地中に置いたに相違ない。』こう書いてポールは之に書き添えて次の如く言つてゐる『それはその通りだろう。だがエリイとエリゼとは、曾て彼等の父ほど立派に彼等の主義を「實行」しはしなかつた。祖父の信仰がどんなに不合理だつたか、それは別として。』

「毎日の行動から見れば、ルクリュ達の父は實際上の共產主義者であつた。一八三二年に國家公認の牧師たる職を辭拒したことから見れば、彼は芽生えの無政府主義者であつた。彼はその全人格によつて、その意見がどうあろうと、心の正しい人々に信仰を吹き込んだ。そしてその子供達は、各自の線に沿うて、その平和な氣分を弘通する天分を與えられた。クリスチャンで

も無神論者でも、無政府主義者でもブルジョアでも、こうした性質の人々は、法律も強權もない社會を可能ならしめる云々」

以上のポール・ルクリュの言の如く、純粹熱烈な性格を持つた、そして信仰一徹な牧師ルクリュの感化が、その子供たるルクリュ兄弟の上に著しかつたことは想像に餘りある。

一八四〇年、エリゼはまだ漸やく十一歳になつたばかりで佛國西端の郷里から、獨逸のライン河畔のヌーヴィエドという處に送られた。父は彼に同伴することが出来なかつたので、彼をただ一人神の御手に托して送り出した。小さな子供は、金錢の使い方も、ストラスグールから先きの地方の言葉も知らずに、その初旅を遂行した。父牧師は、この地の『モラヴィア同胞教會』に幻想的信頼を寄せ、既に長男エリイをここに送つて置いたのである。この教會は、十八世紀に有名だつたツインツェンドルフ伯が基督教社會主義的精神を以て創立し、全然インタナショナルの組織を成していたのであるが、同處にいた同胞達の中には、およそ教會の本旨とは相反する精神の持主も少なくなかつた。民族間の排他自慢、富と權勢への阿諛、殊に一部の同胞達の佛人に對する憎惡、等の事實は、ルクリュ兄弟の深刻に不快を感じたところであつた。ただこの生活に於て、彼等は獨逸語を習得し、後日の英國の文豪ジョージ・メレヂスと親友になつた。殊に注意す

べきことは、彼等がこの機會、この少年時に於て、國民的排他思想や、富貴阿諛精神の如何にも醜いことを、その無垢の魂に深く印象づけられたことである。彼等が自由と平等と友愛と世界平和とに一生涯を捧げるに至つた生活の第一歩は、既にこの時から方向づけられたとさえ見られるのである。

ヌーヴィエドに着くや、エリゼは決然と勉強を始めた。數週間にして彼は授業を受くべく充分にドイツ語を習得した。彼は驚くべき想像力と理解力とを有し、先生の授ける課題に就て、先生の説明に先だつて早くもその意義を了解するほどであつた。況んやドイツ人の同胞よりは遙かに迅速にその眞義を悟るのであつた。

彼等はこのモラヴィヤン教會に一八四二年まで留まり、同年ここを去つて故郷サント・フォアのプロテスタントの學校に入り、一八四七年までそこに在學した。